発掘現場から 文化力 POWER OF CULTURE

埋蔵文化財発掘調査現地説明会資料

平成 27 年 6 月 27 日（土）

太宰府市教育委員会文化財課

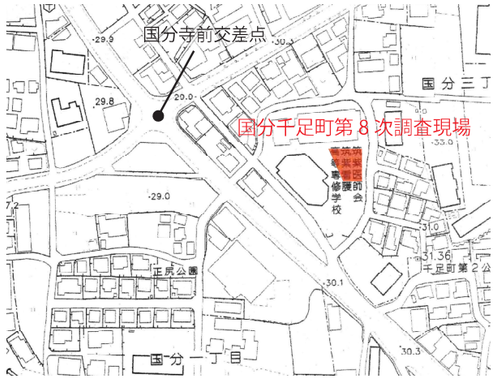
水とうまくつき合っていた弥生のムラ

国分千足町遺跡第８次調査（こくぶせんぞくちょう）

はじめに

国分地域で有名な遺跡と言えば、国史跡・筑前国分寺跡や、近年、戸籍に関する最古の木簡が見つかった国分松本遺跡などがあり、古代の遺跡のイメージが強いのではないでしょうか？

今回行なった国分千足町遺跡の発掘調査では、弥生時代中期（約 2,000 年前）を中心とした集落跡の一部が確認されています。調査地は、砂地盤が主で比較的湧水点が浅く、そのため有機物が遺存しやすい環境にあり、木柱などの木質遺物が出土しています。地下水を利用した貯木（木材を水漬け保管したもの）も確認されました。



調査地位置図

弥生時代って？

弥生時代は、およそ紀元前５世紀から紀元後３世紀の間とされ、大陸から水稲耕作が伝わり農耕文化が定着した時代です。太宰府市内では、国分地域や大佐野・向佐野地域等で集落跡が確認されています。

今回の調査で見つかった主な遺構

調査区の南側は後世に削平を受けており、調査区の北半で弥生時代中期の遺構が確認されています。

①掘立柱建物跡【弥生時代中期】

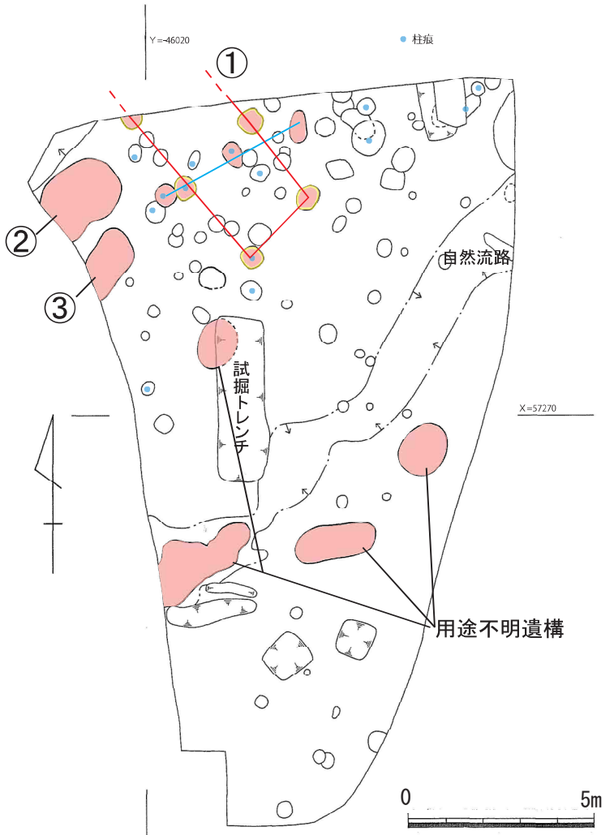
素掘りした穴に木柱を埋め込んで建てた建物です。現状で１間 ×2 間の北西ー南東方向の建物が１棟確認できるほか、北東ー南西方向の建物と考えられる柵列状のものがあります。この他にも、柱の痕跡のある穴がいくつかあり、複数棟の掘立柱建物か柵があったと考えられます。柱穴には、木柱が遺（のこ）っているものや、柱穴の底に「礎盤（そばん）」といって柱が沈み込むのを防ぐために板や丸木が据えられたものもありました。

調査区全景（北から撮影）

柱を支えていた礎盤

木柱が遺存していた柱穴

掘立柱建物跡（南東から撮影）



②廃棄土坑？【弥生時代中期】

壊れた土器などがまとまって出土し、いらなくなった土器を捨てたものだと考えられます。穴はいびつに掘られており、もとは粘土を採掘した跡の可能性があります。

③貯木土坑【弥生時代中期】

ここでは地面を砂の層まで掘り下げると湧水します。それを利用して、木材を水漬けして保管していたと考えられる穴です。当時、木を加工する道具は石器が主で、木材を加工しやすくするために水漬けにしたようです。土坑内からは、板状に加工された木材や、丸太を縦半分に割ったものが出土しています。木器の製作工程のうち、伐採してすぐの粗加工の段階のものを保管していたものです。どのような木器を作ろうとしていたのか、木材の用途ははっきりとしませんが、厚めの板状の材は皿のような器とも考えられます。西隣の第 4 次調査でも、同様に加工途中の木製品などを水漬けした土坑が見つかっており、この集落で木器を製作していたことを裏付ける遺構です。

水漬けされた木材の出土状況

縦割りされた丸太材

調査区全体では、弥生時代前期後半から中期にかけての土器が出土しました。周辺の調査でも、同じように弥生時代中期の住居跡や甕棺墓等が確認されています。今回の調査地近辺では、掘立柱建物と貯木遺構を主とする遺構展開をしており、弥生時代の集落内の土地利用に区分けがあるようすもつかめそうです。

また、砂地で水が湧きやすく軟弱な地盤に対して、柱の下に礎盤を据える工夫をしていたことや、材木の性質を理解して貯木を行うなど、弥生人たちの知恵を遺構・遺物から見ることができます。